

認識動詞構文と間スペース同定

今田 水穂

要 旨

「太郎は UFO でないものを UFO だと思った」は自然だが、「太郎は UFO でないものが UFO だと思った」は不自然である。この違いは、前者の「UFO でないものを」が主節の要素であり、後者の「UFO でないものが」が従属節の要素であることによって生じる。前者の文では、「UFO でないもの」は現実スペースの要素 *a* を表しており、その *a* の信念スペースにおける対応物 *a'* が「UFO だ」という現実スペースとは異なる属性を持つことを述べている。一方、後者の文では、「UFO でないもの」は信念スペースの要素 *a'* を表しており、その *a'* が同じ信念スペース中で「UFO だ」という属性を持つことを述べているので意味的に矛盾する。このことは、「A を B だと思ふ」構文の主節ヲ格句と従属節主語が同一指示ではなく間スペース同定関係にあることを意味する。本稿は、阿部 (2002, 2010) および陸 (2006) の分析を踏まえつつ、「と思ふ」構文の統語的、意味的構成を分析する。

キーワード

認識動詞構文 メンタル・スペース 間スペース同定 指示の不透明性 「と思ふ」

1 はじめに

阿部 (2002) は、認識動詞構文について興味深い例を提示している。(1) のような事例は「花子」をヲ格でもガ格でも表示することができるが、(2) のような事例は「UFO でないもの」をヲ格で表示することはできるがガ格で表示することができない。

- (1) a. 太郎は花子を女優だと思っている。
b. 太郎は花子が女優だと思っている。
- (2) a. 太郎は UFO でないものを UFO だと思った。
b. # 太郎は UFO でないものが UFO だと思った。

本稿では阿部 (2002) に倣って、「～は～を～だと思ふ」を認識動詞構文、「～は～が～だと思ふ」を引用構文と呼ぶ。(2a, b) の許容度の違いは、メンタル・スペース理論の考え方をを用いると簡潔に説明することができる。「UFO でないものを」は現実スペースの存在物 *a* を表し、「UFO でないものが」は信念スペースの存在物 *a'* を表す。(2a) は現実スペースで UFO でないものが信念スペースでは UFO であるということを表しているため矛盾を起こさないが、(2b) は信念スペースで UFO でないものが同じスペースで UFO であるとい

う属性を持つことを表しており意味的に矛盾が生じる。本稿は阿部 (2002, 2010) の統語論的分析、および陸 (2007) の意味論的分析を踏まえつつ、「と思う」構文の統語構造と意味構造、および統語構造と意味構造のマッピングの問題について論じる。

2 先行研究

阿部 (2002) は、(2a, b) は異なる統語構造を持つという分析を提示している。(2a) は、(3) のような小節 (small clause) を持ち、小節においてはヲ格句が指示的に透明な解釈を受けるため (2a) は許容されるとしている。

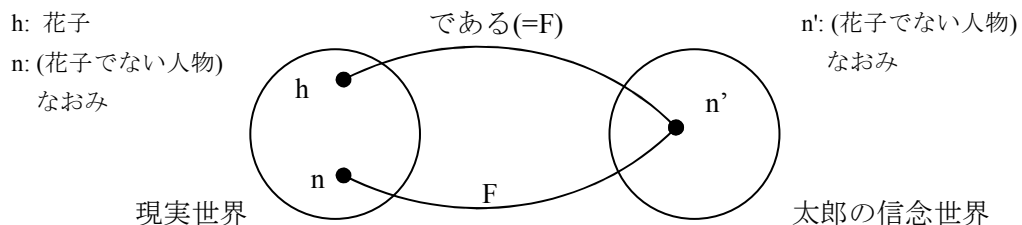
(3) Xガ [sc Aヲ [pro Bダト]]V

阿部 (2002) は、認識動詞構文の「Aヲ」は発話者の信念に属する要素だが、引用構文の「Aガ」は太郎の信念に属する要素であり、引用構文では太郎の信念の中で「UFOでないもの」と「UFOであるもの」を同定するという矛盾したことを言っているため不自然になるとしている。また、阿部 (2010) は (2a, b) と同種の文 (4a, b) について、引き続き構造が異なるという分析を提示しているが、小節の存在については言及せず、(4a) はヲ格句と副詞的補足語を取る構文、(4b) は従属節を取る構文であるという新しい提案をしている。

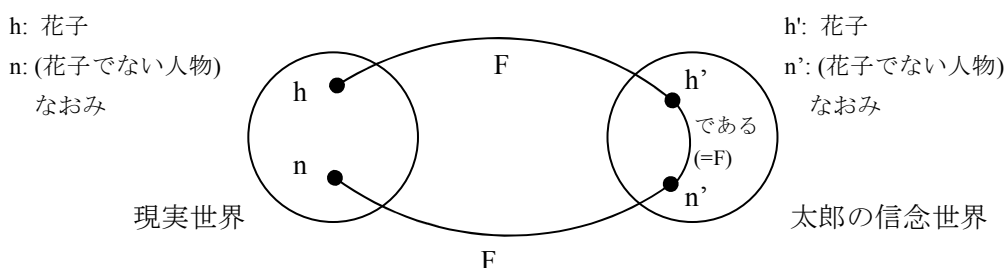
- (4) a. 山田は人魂でないものを人魂だと思った。 XがAをBだと副詞的補足語 思う
 b. # 山田は人魂でないものが人魂だと思った。 Xが……節と 思う

陸 (2007) は、阿部 (2002) の分析をメンタル・スペース理論の考え方をを用いて再分析している。(5a) は現実世界の花子 h と信念世界の花子でない人物 n' を結びつけているので許容されるが、(5b) は同一スペース中で花子 h' と花子でない人 n' を結びつけているので意味的に矛盾するとしている。

- (5) a. 太郎は花子を花子でないと思った。



b. # 太郎は花子が花子でないと思った。



陸 (2007) は、(5a) の「花子」は現実世界の h を表し、(5b) の「花子」は信念世界の h' を表していると思われているものと考えられる。述語「花子でない」は、主語 (h または h') が n' (花子以外の人物) と結び付けられることとして記述されている。 F はメンタル・スペース理論で用いられる語用論的関数であり、2つの要素の間に何らかの語用論的關係があることを表す。語用論的関数は換喩などの現象を説明するためにも用いられるが、コンピュータ文「A is B」はAとBがFによって結び付けられていることを示す働きがあり (Fauconnier, 1985, § 5.1.1)、(5a) では h と n' が、(5b) では h' と n' がコンピュータによって結び付けられている。(5a) は現実世界の h が信念世界の n' と対応することを述べているだけなので矛盾しないが、(5b) は信念世界の中で h' (=花子) が n' (=花子でない人) であることを述べているので矛盾する。

本稿は、概ね阿部 (2002)、陸 (2007) の意味論的分析、および阿部 (2010) の統語論的分析を支持するが、分析の詳細について見解の異なる部分や補足すべき点があるため、修正案を提示する。特に、統語構造上の主節、従属節と、意味構造上のスペースとの対応関係を明確化し、ヲ格句の統語上の位置について意味論の観点から提案を行う。

3 「と思う」構文の統語構造と意味構造

認識動詞構文と引用構文の許容度の違いを説明するために、本稿ではこれらの構文の統語構造と意味構造 (スペース構造) に関して、次のような仮説を提案する。

(6) 統語構造に関する仮説

認識動詞構文と引用構文はいずれも従属節を持つ。認識動詞構文においては、ヲ格句は主節の要素であり、従属節主語は主節ヲ格を先行詞とする pro である。

a. 認識動詞構文 $[s NP$ は NP_i を $[s pro_i NP$ だ]と 思った]

b. 引用構文 $[s NP$ は $[s NP$ が NP だ]と 思った]

(7) 統語構造と意味構造のマッピングに関する仮説

認識動詞構文と引用構文はいずれも、主節が現実スペースの事態を表し、従属節が信念スペースの事態を表す。認識動詞構文の主節ヲ格は、現実スペースの要素を同

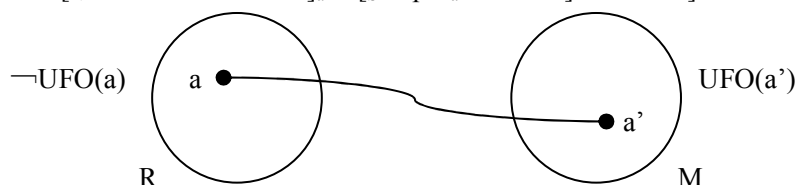
定する。どちらの構文においても、従属節主語は信念スペースの要素を同定する。

これらの仮説によって、認識動詞構文と引用構文の許容度の違いがどのように説明されるか、具体的に見ていくことにする。(6)の仮説に従うと、(2a, b)の文はそれぞれ次のような構造を持っていると仮定される。

- (8) a. [S 太郎は UFO でないもの_i を [S pro_i UFO だ] と思った]
 b. * [S 太郎は [S UFO でないものが UFO だ] と思った]

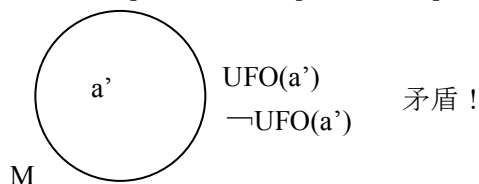
また (7) の仮説から、(8a=9) の「UFO でないもの」は現実スペース R の対象 a を表し、pro は信念スペース M の要素 a' を表す。a' は a の信念スペースにおける対応物である。「UFO でないもの」という記述により a には《UFO でない》という属性が与えられるが、信念スペースにおける対応物 a' は必ずしも《UFO でない》という属性を持たない。「UFO だ」は従属節主語 a' が《UFO である》という属性を持つことを表すが、a' は必ずしも《UFO でない》という属性を持たないので意味的な矛盾は生じない。結果として、この文は適切に解釈される。

- (9) [S=R 太郎は[NP UFO でないもの]_a を[S=M pro_{a'} UFO だ] と思った]



一方、(8b=10) では「UFO でないもの」は信念スペースの要素 a' を表す。この記述により a' には《UFO でない》という属性が与えられる。「UFO だ」は従属節主語 a' が《UFO である》という属性を持つことを表す。結果として、a' は《UFO でない》と《UFO である》という矛盾する2つの属性を与えられることになり、意味的に矛盾する。結果として、この文は適切な解釈を受けることができず不適切な文となる。

- (10) [S=R 太郎は[S'=M [NP UFO でないもの]_{a'} が UFO だ] と思った]



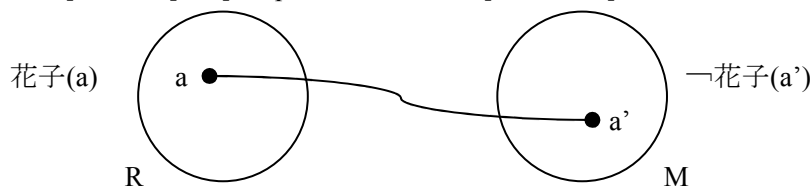
この考え方は多くの点で阿部 (2002, 2010) や陸 (2007) の考え方を踏襲しているが、い

くつかの点で修正を加えている。統語構造に関して言うと、本稿は認識動詞構文のヲ格句を主節の要素と見なす点で、阿部 (2010) の考え方を踏襲している。一方、認識動詞構文の「だと」句については、阿部 (2010) は副詞的補足語であるとするのみで、その内部構造について具体的な言及をしていないのに対して、本稿では、認識動詞構文の「だと」句は (引用構文の場合と同じく) 従属節構造である、というより具体的な分析を提示している¹。阿部 (2010) も指摘するように、このような分析は、主節ヲ格と従属節主語が同一の対象 *a* を指示すると考えると、認識動詞構文も引用構文の場合と同様に *a* が矛盾する2つの属性を同時に持つことになり、意味的に破綻する。しかし主節ヲ格は *a* を、従属節 *pro* は *a'* を表すとすれば、両者が異なる属性を持つことは意味的な矛盾を引き起こさない。

代名詞とその先行詞が厳密な同一指示関係をなさないという現象は、必ずしも特殊なものではない。例えば “My tail fell off, but it grew back”(Postal, 1967) という文では、代名詞 *it* は *my tail* を先行詞としているが、その指示対象は厳密には同一ではなく、このような現象は *sloppy identity* と呼ばれる。メンタル・スペース理論の考え方をを用いると、認識動詞構文の主節ヲ格と従属節 *pro* は同一指示ではなく、間スペース同一関係にある2つの要素 *a* と *a'* を表しているのだと説明することができる。このような意味論的説明を与えることによって、認識動詞構文は従属節を持ち、従属節の主語は主節ヲ格を先行詞とする *pro* であり、従属節述語は従属節主語 *pro* に対して叙述を与えるという統語論的説明を保持することが可能となる。

意味構造に関して言うと、本稿は認識動詞構文の主節ヲ格が現実スペースの要素を表すという考え方を採用しているが、これは陸 (2007) の考え方を踏襲している。陸 (2007) は、認識動詞構文のヲ格句は現実スペースの要素を表し引用構文のガ格句は信念スペースの要素を表すとしている。ただし陸 (2007) が現実スペースの要素 *h* に対して《花子でない》という属性を与える (信念スペースの要素 *n'* と直接結びつける、(5a)参照) のに対して、本稿の考え方では信念スペースの要素 *a'* に対して《花子でない》という属性を与える。

(11) [_{S=R} 太郎は[_{NP} 花子]_aを[_{S=M} *pro*_{a'} 花子でない]と思った]



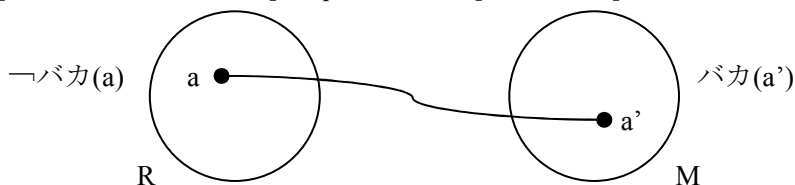
¹ 認識動詞構文が従属節を持ち得ることは、[_S 太郎はディズニーランドを [_S 東京にある] と思っていた]のように項と述語からなる節が「と」の前に生起する例があることを考えると、明らかであるように思われる。ただし「だと」ではなく「と」が用いられる文では、「みんなはこれを吉報と思った」「*みんなはこれが吉報と思った」のように「が」ではなく「を」が用いられる傾向がある (cf. 阿部 2004, 金 2010)。このような事例については本稿では扱わないが、文全体が単文化していて従属節を持っていない可能性がある (「吉報」が述語として機能していないのでガ格を付与しない)。

これは、本稿が統語構造と意味構造の対応関係について、陸 (2007) の分析よりも厳格な規則性を仮定していることの帰結である。陸 (2007) の考え方では、「花子を」と「花子でない」の間に主語と述語の関係が成立することについて何らかの統語的ないし意味的な説明を与える必要があるが、十分に明確化されていない。本稿の考え方では、「花子でない」という述語は、どちらの構文においても従属節の主語に対して叙述を与える。認識動詞構文においては、「花子でない」は主節ヲ格ではなく従属節 pro に叙述を与える。これは意味的には、a ではなく a' に《花子でない》という属性を与えることを意味する。この分析では統語構造と意味構造の間に緊密な対応関係が設定されており、これによって認識動詞構文と引用構文の意味の違いを、2つの文の統語構造の違いと直接結び付けて一般的に説明することが可能となる。

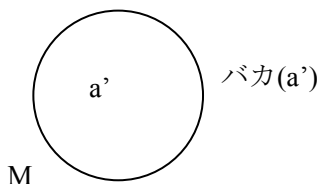
4 意味の違いを生み出すもの

認識動詞構文のヲ格は現実空間の要素を表し、認識動詞構文の pro と引用構文のガ格は信念空間の要素を表すと述べた。このような統語構造と意味構造の対応関係は UFO 構文に特有のものではなく、「と思う」構文一般に適用される。(12a) の「次郎」は現実空間の次郎 a を表し、a は「バカだ」という属性を持たないが、その信念空間における対応物 a' が「バカだ」という属性を持つ。(12b) の「次郎」は信念空間の次郎 a' を表し、その a' が「バカだ」という属性を持つ。

(12) a. [S=R 太郎は 次郎_a を[S=M pro_{a'} バカだ] と思った]



b. [S=R 太郎は [S=M 次郎_{a'} が バカだ] と思った]



多くの場合、認識動詞構文と引用構文は直感的に区別可能な意味の違いを持たない。UFO 構文において意味の違いが生じるのは、この構文が「UFO でない」と「UFO だ」という互いに矛盾する2つの属性を表す記述を含んでいることによる。認識動詞構文「A を B と思う」では A が表す属性は現実空間の要素 a に対して与えられ、引用構文「A が B と思う」では A が表す属性は信念空間の要素 a' に対して与えられる。また、どちらの構文においても B が表す属性は信念空間の要素 a' に対して与えられる。従って、A と B が

互いに衝突するような属性を表している場合には、認識動詞構文では A は a の属性を、B は a' の属性を表すので矛盾しないが、引用構文では A と B の両方が a' の属性を表すので矛盾が生じる。UFO 構文では、A=《UFO でない》と B=《UFO だ》が互いに衝突するような属性を表しているの、認識動詞構文と引用構文の間で意味の違いが生じるが、(12) の文では A=《次郎》と B=《バカだ》が互いに衝突するような属性を表しているわけではないので、そのような意味の違いが生じない。

表1 主語と述語の衝突

| | 認識動詞構文 A(a) & B(a') | 引用構文 A(a') & B(a') |
|-------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
| バカ構文 A=次郎, B=バカ | Acceptable 次郎(a) & バカ(a') | Acceptable 次郎(a') & バカ(a') |
| UFO 構文 A=¬UFO, B=UFO | Acceptable ¬UFO(a) & UFO(a') | Conflict! ¬UFO(a') & UFO(a') |

このことは、単に2つのスペースが関与しているというだけで、意味の違いが生み出されているわけではないということを示している。意味の違いが生じるためには、2つの構文の意味の違いを浮き彫りにするような、何らかの意味論的要素が存在する必要がある。UFO 構文においては、2つの記述の衝突が意味の違いを生み出す要因になっている。別の意味論的要素が、意味の違いを生み出す場合もある。阿部 (2002) は、認識動詞構文と引用構文で意味の違いが生じるような、他の興味深い事例を提示している。

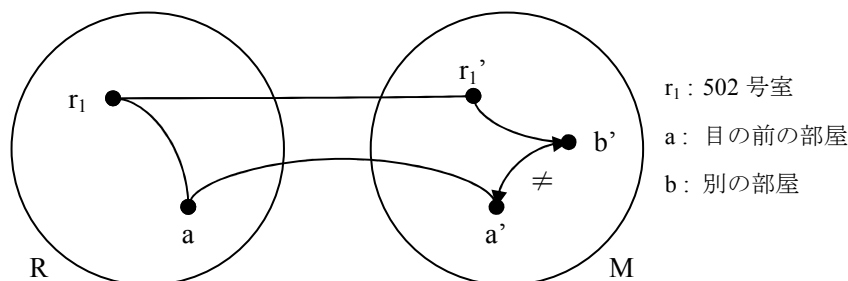
- (13) a. 太郎は 502 号室を別の部屋だと思った。
- b. 太郎は 502 号室は別の部屋だと思った。

(13a) は、太郎の目の前に 502 号室があるが、太郎はその部屋を 502 号室とは別の部屋だと思ったという意味で解釈される。一方、(13b) は、太郎は 502 号室を探しているが、目の前の部屋とは違う場所にある別の部屋が 502 号室だと思ったという意味で解釈される。2つの文は意味が違うが、UFO 構文のように一方が意味的に矛盾しているわけではない。すなわち、《502 号室》と《別の部屋》という属性が衝突することによって、意味の違いが生み出されているわけではない。

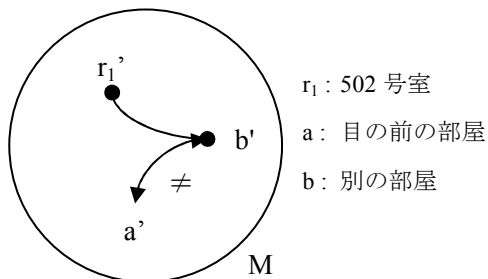
阿部 (2002) は、(13a) の「502 号室」は指示的に透明であり、(13b) の「502 号室」は指示的に不透明であるとしている。この指摘は妥当だが、(13a, b) の意味の違いを説明するためには、指示の不透明性だけでは十分ではない。というのも、(13a) は阿部 (2002) の指摘する読みの他に、(13b) と同じ読みも持つ。従って (13a) の「502 号室」が指示的に透明で (13b) の「502 号室」が指示的に不透明であるというだけでは、2つの文の可能な読みの違いを説明するために十分ではない。

2つの文の可能な読みの違いは、メンタル・スペース理論で言うところの役割と値という概念を用いることによって説明することができる。「502号室」という記述は、役割 r_1 を表すこともできるが、その値 a を表すこともできる。「502号室」が役割を表す場合には、(13a)の「502号室」は現実スペース R の要素 r_1 を、従属節 pro は信念スペース M の要素 r_1' を表し、「別の部屋だ」は r_1' の値が a' ではなく b' であることを表す (=14)。また、(13b)の「502号室」は信念スペース M の要素 r_1' を表し、「別の部屋だ」は r_1' の値が a' ではなく b' であることを表す (=15)。結果として、「502号室」が役割を表す場合には、どちらの文も r_1' の値が b' であることを表すことになり、(12)のバカ構文の場合と同様、認識動詞構文と引用構文の間に実質的な意味の違いは生じない。

(14) [$S=R$ 太郎は502号室 r_1 を [$S'=M$ pro r_1' 別の部屋 b' だ]と思った]

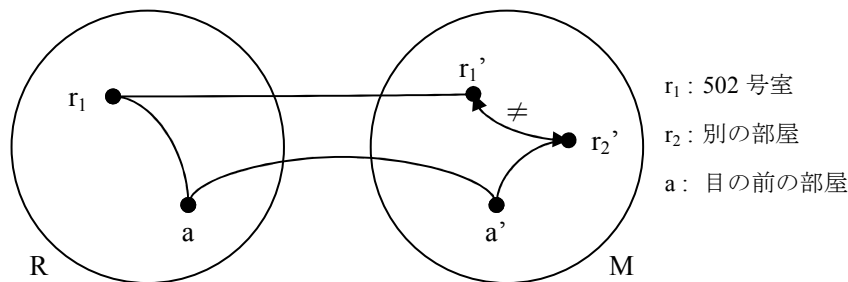


(15) [$S=R$ 太郎は [$S'=M$ 502号室 r_1' は別の部屋 b' だ]と思った]

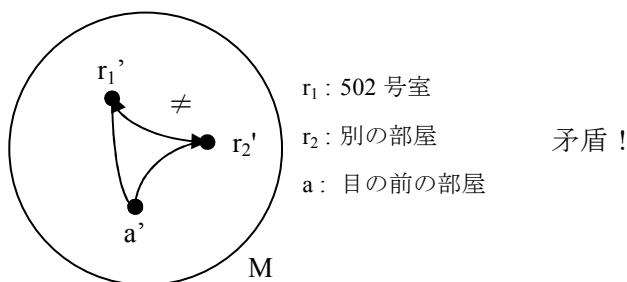


一方、「502号室」が値を表す場合には、(13a)の「502号室」は R の要素 a を、従属節 pro は M の要素 a' を表し、「別の部屋だ」は a' が r_1' ではなく r_2' を役割として持つことを表す (=16)。これが、阿部 (2002) の指摘する (13a) の読みに相当する。(13b) の場合には、「502号室」は M の要素 a' を表し、「別の部屋だ」は a' が r_1' ではなく r_2' を役割として持つということを表す (=17)。しかしこの場合には、太郎は《502号室》(= r_1') の値を a' だと思っているのと同時に、 a' は《502号室以外》(= r_2') であると思っているということになり、意味的に矛盾する。結果として、「502号室」が値を表す場合には、UFO文の場合と同様に、認識動詞構文は可能だが引用構文は不可能だということになる。

(16) [S=R 太郎は502号室_aを[S'=M pro_{a'} 別の部屋_{r2'} だ]と思った]



(17) [S=R 太郎は[S'=M 502号室_{a'} は別の部屋_{r2'} だ]と思った]



認識動詞構文 (13a) の「502号室」は、(14) の読みでは役割 r_1 を表し、(16) の読みでは値 a を表すが、どちらの場合も現実空間 R の要素を表しているという意味において指示的に透明である。また、引用構文 (13b) の「502号室」は、(15) の読みでは r_1' を表し、(17) の読みでは a' を表すが、どちらの場合も信念空間 M の要素を表しているという意味において指示的に不透明である²。「502号室」が役割を表す場合には、(13a) と (13b) の間に実質的な意味の違いが生じない。2つの文が阿部 (2002) の指摘するような意味の違いを持つのは、(13a) が「502号室」を値として解釈する読みを持つためである。

「502号室」が値として解釈される場合に限って言うと、部屋構文は UFO 構文と似た性質を持つ。UFO では、認識動詞構文においては a' が《UFO でない》という属性を必ずしも持たないが、引用構文においては a' が《UFO でない》という属性を持つという違いがあり、それによって《UFO だ》という述語と衝突するか否かの違いが生じていた。部屋構文では、認識動詞構文においては a' が《502号室》という役割 r_1 と必ずしも結び付けられていないが、引用構文においては a' が役割 r_1' と結び付けられているという違いがあり、それによって《別の部屋だ》(役割 r_2' と結び付けられる) という述語と衝突するか否かの違いが生じている。このように、認識動詞構文と引用構文の意味の違いは、従属節主語 a' が2つの構文で異なる属性を持ち得ること、および従属節述語がその属性と衝突するような属性

² 記述句の役割の読みと値の読みの区別は、Donnellan (1966) の属性的用法と指示的用法の区別に相当するとされる。「502号室」の(14-17)の読みは、Fauconnier (1985) の言う《属性的かつ透明な読み》、《属性的かつ不透明な読み》、《指示的かつ透明な読み》、《指示的かつ不透明な読み》にそれぞれ相当する。De dicto/de re の区別と属性的/指示的の区別の違いに関する Kripke (1977) の言及も参照されたい。

を表すことによって生じる。

UFO 構文と部屋構文の違いは、UFO 構文の引用構文は矛盾しない適切な解釈を持たないが、部屋構文の引用構文は「502 号室」を値でなく役割として解釈すれば、適切な解釈を持つという点である。これにより、UFO 構文の認識動詞構文と引用構文が、前者のみ可能で後者は不可能だったのに対して、部屋構文の認識動詞構文と引用構文は、阿部(2002)の指摘したような適格かつ異なる意味を持った解釈を受けることになる。以上のように、認識動詞構文と引用構文の意味の違いは、指示の不透明性、役割の読みと値の読み、従属節述語の解釈など、いくつかの意味論的要素から複合的に分析する必要がある。

5 まとめ

本稿はメンタル・スペース理論の考え方をを用いて、認識動詞構文と引用構文の意味解釈の問題を論じた。認識動詞構文「A は B を C だと思った」と引用構文「A は B が C だと思った」は、それぞれ次のような構造を持つ。

- (18) a. 認識動詞構文 [s A は B_i を [s pro_i C だ]と 思った]
 b. 引用構文 [s A は [s B が C だ]と 思った]

認識動詞構文の B は現実スペースの要素 a を表すが、認識動詞構文の pro と引用構文の B は信念スペースの要素 a' を表す。認識動詞構文の pro は、統語的には B を先行詞とするが、意味的には厳密な同一指示の関係にはない。

認識動詞構文と引用構文は多くの場合には実質的な意味の違いを持たないが、一定の条件下においては意味の違いが生じる。本稿では、B と C が表す属性が衝突する場合に、意味の違いが生じることを示した。認識動詞構文では a' は B が表す属性を持つとは限らないが、引用構文では a' は B が表す属性を持つ。このため、C が B と衝突するような属性を表す場合には、認識動詞構文は適切な解釈を持つが、引用構文は適切な解釈を持たない。「太郎は UFO でないものを UFO だと思った」が自然で「太郎は UFO でないものが UFO だと思った」が不自然なのは、こうした事情による。

認識動詞構文と引用構文の間に意味の違いが生じる別の事例は「太郎は 502 号室を別の部屋だと思った」「太郎は 502 号室は別の部屋だと思った」のような事例である。この例では、「502 号室」が役割ではなく値を表す場合に限り、意味の違いが生じるということに注意する必要がある。「502 号室」が役割を表す読みでは認識動詞構文と引用構文の間に意味の違いは生じないが、「502 号室」が値を表す読みでは UFO 構文の場合と同様に認識動詞のみが可能で引用構文は不可能となる。

本稿では従属節主語を pro と仮定して議論を行ったが、当然、痕跡 t とする考え方もあり得る。筆者は生成統語論者ではなく、また本稿の主張は主節ヲ格と従属節主語は厳密な同一指示でなくてもよいということであるため、従属節主語が pro か t かといった問題は

本稿では取り扱わない。しかし語順や削除の問題を取り扱う場合には、そうした区別についてより詳細な分析が必要となる。阿部 (2010) は、認識動詞構文が「*太郎はバカだと次郎を思った」のようにヲとトの位置を逆にすることができないという問題について論じている。可能な分析の1つは主節ヲ格と従属節主語の間に束縛関係があり、語順を変えると適性束縛違反が生じるというものである。しかし、阿部 (2010) は主節ヲ格と従属節主語が同一指示であると考えたと意味論上説明がつかない現象 (UFO 構文) があることからこうした考え方を取らず、認識動詞構文は語順固定型対格付与構文 (「*太郎は兵隊にかかしを見立てた」のようなヲ格句と文中の他の要素の位置を逆にできない構文) の一種であるという考え方を提示している。本稿の考え方では、主節ヲ格と従属節主語は必ずしも同一指示である必要はないので、束縛関係に基づく分析も考慮の余地が残されている。このような問題を扱う場合には pro か t かということは問題になるだろうが、こうした問題については統語論者の研究に委ねたいと思う。

また本稿では言及しなかったが、ヲ認識動詞構文は「次郎のことをバカだと思った」のように、ヲ格句がしばしば「のこと」の形で現れるという現象がある。このような問題をどのように考えるかについては、今後の課題としたい。

参考文献

- 阿部二郎 (2002) 「認識動詞構文について」『日本語文法』2-1: 89-108.
- 阿部二郎 (2004) 「現代日本語における引用句の諸相: 引用句内の構造を中心に」筑波大学博士 (言語学) 学位論文.
- 阿部二郎 (2010) 「日本語におけるいわゆる「例外的格付与構文」の再考—語順固定型対格付与構文の提案—」第7回筑波大学応用言語学研究会.
- 金賢娥 (2010) 「「NP1 ヲ NP2 ト V」の意味構造—韓国語構文「NP1rul NP2 rago/ro との比較を通じて—」筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域月例会.
- 陸丹 (2007) 「『思う』認識動詞構文について—補文述語制約の観点からの一考察—」『筑波応用言語学研究』14: 115-128, 筑波大学人文社会科学研究科.
- Donnellan, K. S. (1966) Reference and Definite Descriptions. *The Philosophical Review* 75-3: 281-304.
- Fauconnier, G. (1985) *Mental Spaces*. MIT Press.
- Kripke, S. (1977) Speaker's Reference and Semantic Reference. *Midwest Studies In Philosophy* 2-1: 255-276.
- Postal, P. (1967) Linguistic anarchy notes. In J. McCawley. Ed. (1976) *Syntax and Semantics* 7: 201-225.
- (今田水穂 筑波大学準研究員)

The Japanese cognitive verb construction and transspatial identity

Mizuho IMADA

“Taro-wa UFO-de-nai-mono-o UFO-da-to omotta” (Taro believed the thing which is not a UFO to be a UFO) is acceptable, but “Taro-wa UFO-de-nai-mono-ga UFO-da-to omotta” (Taro believed that the thing which is not a UFO is a UFO) is unacceptable. This difference is generated by the fact that the former sentence has the accusative phrase “UFO-de-nai-mono-o” (the thing which is not a UFO) in the main clause and the latter sentence has the nominative phrase “UFO-de-nai-mono-ga” in the subordinate clause. In the former sentence, “UFO-de-nai-mono-o” indicates the object a in the speaker’s reality, and the sentence says the object a' in Taro’s beliefs, which is the counterpart of a , has the property “be a UFO,” which is different from reality. On the other hand, in the latter sentence “UFO-de-nai-mono-ga” indicates the object a' in Taro’s beliefs, and the sentence is semantically contradictory because it says that a' has the property “be a UFO” in the same space. This means that in the cognitive verb construction “A-o B-da-to omou,” the accusative phrase in the main clause and the subject of the subordinate clause are not co-referential but transspatial identical. This paper analyzes the syntactic and semantic structure of the “to omou” construction based on Abe’s(2002, 2010) and Lok’s(2006) analyses.